

# “但馬牛”今昔物語

兵庫県立但馬牧場公園 「但馬牛博物館」

館長 渡邊 大直

## 第12回「種雄牛系統の分類」

あつた蔓造成が本格的に始まった頃の基礎牛の系譜を記した「兵庫県新蔓牛譜 第1編あつた蔓」(1946年)には基礎種雄牛として「田尻」とともに「福波」の名前があります。

「田尻」は中土井系、「福波」は熊波系の種雄牛です。つる牛は系統繁殖により特徴ある形質の遺伝子をホモ化しようとするのですから、当然種雄牛も同じ家系の牛になる筈なので、少し違和感があります。

ところがこの時点で、「中土井系」や「熊波系」といった種雄牛系統はまだ分類されていなかったようで、終戦前後に奥井廉種畜場長、神原亀松同但馬分場長によって分類されたと云われます。つる牛造成もその契機の一つだったのかも知れません。

種雄牛系統は父から息子と繋がる父系で分類され、奥井場長らは美方郡に起源する中土井、熊波、長栄、第二中島、満重系と城崎郡に起源する浦上、城一、勘右衛門系の8系統に分類しました(表1)。

表1 種雄牛家系と始祖種雄牛

系統名	始祖種雄牛			
	名号	登録番号	生年月日	出生地
中土井系	中土井	補美 0984	1920/3/10	美方郡
熊波系	熊波	補美 0983	1921/5/28	美方郡
長栄系	長栄	予兵 0001	1922/3/30	美方郡(小代村)
第二中島系	第二中島	予兵 0004	1923/2/20	美方郡(照来村)
満重系	満重	補美 0536	1924/3/5	美方郡(八田村)
浦上系	浦上	補城 0006	1922/4/15	城崎郡(口佐津村)
城一系	城崎一	補城 0238	1924/5/11	城崎郡(奥竹野村)
勘右衛門系	久斗山	補城 0139	1925/2/22	城崎郡(奥佐津村)

種雄牛系統名には始祖牛の名前が付くのが通例ですが、勘右衛門系に「勘右衛門」という牛が見あたりません。

「和牛種雄牛系統的大成」(1982年 全国和牛登録協会)には、勘右衛門系は椒→久斗山→第二桑本と続く家系で、今日残っているのは第二桑本→第四森本→伊府森→勘伊府と続く系統とあります。これからすると、勘右衛門系の始祖種雄牛は「椒」あるいは「第二桑本」とすべきかも知れませんが、神原分場長の「和牛種牝牛系統譜草稿」に椒→久斗山→第二桑本と続く家系を「勘右衛門系」、椒→久斗山→第三畑→第十下岡と続く家系を「椒系」とあるので、「久斗山」を始祖種雄牛としました。

明治中期、種雄牛の改良上の意義が認識され始めると、出石郡と多紀郡は種雄牛導入助成(1888年)、七美、二方両郡(現美方郡)では、それまで種付けを専門に行う事業者が行っていた種雄牛事業を町村事業化(1892年)するといった動きが起こり、それ以後、他の地域でも町村等が種雄牛事業を行うようになりました。

そして時代は、洋種奨励とその破綻、血統の整理へと動き、1918年には但馬の畜産組合が連合して「但馬牛血統登録組合」を設立し、血統登録が始まりました。そうすると、登録の窓口である郡畜産組合が種雄牛事業を行うのが合理的だったので、種雄牛事業は郡畜産組合に移り、種雄牛供用は町村単位から郡単位に拡大しました(1927年)。

さらに1938年には中央畜産会による中央登録が始まり、全国で統一した登録制度となりました。

それから7年ほど経った頃、奥井場長らは種雄牛系統の分類に取り組みました。

そこで、県内で供用したと思われる血統登録種雄牛頭数を生年別に、奥井場長らの系統分類に従ってまとめてみました（表2）。

表2 種雄牛父系別種雄牛出生頭数の推移 (単位:頭)

生年	中土井	熊波	長栄	第二中島	満重	浦上	城一	勘右衛門	その他	合計
～1925年	10.3% 11	3.7% 4	0.9% 1	0.9% 1	0.9% 1	2.8% 3	0.9% 1	0.9% 1	78.5% 84	100.0% 107
1926～1935年	33.3% 175	3.2% 17	12.0% 63	13.1% 69	14.8% 78	5.5% 29	1.9% 10	2.1% 11	14.1% 74	100.0% 526
1936～1945年	41.3% 348	5.1% 43	2.3% 19	9.4% 79	27.3% 230	3.1% 26	4.9% 41	2.9% 24	3.8% 32	100.0% 842
1946～1955年	50.5% 905	17.2% 309	2.0% 36	0.4% 8	22.5% 403	0.3% 5	5.6% 101	0.6% 10	0.9% 16	100.0% 1,793

奥井場長らが分類した8系統は昭和(1926年)以降勢力を伸ばし、分類当時になると、種雄牛の殆どを占め、現役種雄牛がいた系統のようです。

ところが、この8系統の中にも優劣がありました。まず中土井系が突出して勢力を伸ばし、次いで満重系が優勢でした。熊波系と城一系は1930年代後半から広がった系統と言えそうです。

一方、長栄系、第二中島系及び浦上系は勢力を縮小しつつありました。

これは産子の評価によって後代を残す種雄牛の選抜があったことの現れで、あつた蔓の基礎種雄牛に長栄系が入らなかったのも、この辺りが影響しているのではないかとも思われます。

とはいえ、奥井場長らは現実に種雄牛がいて、繁殖雌牛の父など影響力のある系統として8系統を選んだのでしょう。(次号につづく)